

# 小学校社会科における地図の 基礎的知識に関する研究

後 藤 努

## 1、はじめに

社会科の学習にとつて欠くことのできない地図は、社会科にとつて必要な地理的思考力を養うためにもその考える場と素材を与える。その地図についての基礎的知識はどのようになっているか、その一部でも探ることができればと思う。調査は児童に対しての質問紙法により農村的性格の強い地域の駒越小・東英小・甲地小の中、高学年を対象とした。

## 2、統 図

(記号)各学年ともよく知っている記号は学校、郵便局、鉄道、温泉、橋、社の記号等で90%以上の児童が知っている。警察署、銀行、病院、城跡は四年で50%程度で学年が進むにつれ低くなる。灯台、炭鉱、商港、集落の記号は四年で30%前後で、高学年では集落が50%と伸び、他の三つも40%前後になる。

また水田以外の地類の記号はいずれも低く、果樹園が四年32%、五年59%、六年62%で水田に次いでいる。しかしそれ以外はいずれも20%以下である。

(方位)四方位は四年で68%、五年91%、六年92%であり、八方位は四年で54%、五年66%、六年で80%ほどの児童が知っている。十六方位は四年はほとんど知っておらず、高学年でも40%程度の児童しか知っていない。

(距離)かんたんな地図から、縮尺の記号を使って実際の直線距離を求めることができた児童は、四年34%、五年48%、六年47%といずれも半分以下である。

(等高線)かんたんな地図で等高線により神社のある高さを読みとれた児童は四年67%、五年76%、六年79%と比較的高いが、水田のある場所の高さとの差を読みとれた児童は四年6%、五年18%、六年19%といずれも低い。

### 3. 描 図

日本全体の地図を他の地図を見ないで描かせてみた。それによると四年では、青森県、北海道を中心とした部分しか描けない児童が46%で圧倒的である。また全体を描けても構成力、表現力が不完全な児童が多い。五年になるとほとんどの児童が日本全体を描けるようになり、一部分不正確な部分があつても全体としての日本がよく把握されており、主な半島も描かれているのが60%ほどあり、その10%近くはほぼ完全に描かれている。六年もほぼ同じ傾向を示している。ただ六年に比して五年が全体は描かれていても構成力も表現力も不正確な地図が多かつたが、それは五年が部分しか描けなかつたのが全体を描けるようになる移行期のためと思ふ。また日本の全体を描ける児童は女子より男子が多い。また描かれている半島も四年では北海道、青森県の各半島は60%以上で、次いで能登、房総、紀伊半島が40%前後で、その他はずつと低い。五年では北海道、青森県の半島が高く90%近くあり、次いで能登、房総、紀伊、高縄、国東、薩摩、大隅半島が高い。また低いのは三浦、知多、島根半島で20%前後である。六年は多少五年より高いがほぼ同じ傾向を示している。

### 4. 地図を利用する態度

地図を見ることへの興味は四年が強く74%が好きと答えている。五年では好きなもの42%、六年49%と低下しているが各学年とも嫌いなのは10%程度であり比較的興味は強いと思ふ。一番多く見る地図は四年では日本の地図と青森県の地図が多く各々36%である。五

年では青森県の地図が14%と急に減少し、日本の地図が63%と高くなる。六年は五年と同じ傾向であるが、世界の地図が多少高くなり他はいくらか低下している。自分の町や村の地図は各学年とも低く10%以下である。

また、学習時以外にもほとんどの児童は多かれ少なかれ地図を見ている。地図帳は四年からほとんど全員が所有するようになり、また地球儀の所有者は10%程度であり、地球儀を見たことのない児童は四年で30%強おる。他はほとんど見た経験をもっている。

#### 5. おわりに

読図・描図・態度の三点から児童の地図についての実態のごく一部についてみてきたが、地図についての知識は全般的にみて高いとは言えない。特に実際に地図をみて考えて読図する問題は低い。また四年と五年の間には大きな進歩が見られるが、五年から六年にかけては著しい進歩がみられず、むしろ後退している点もある。六年になり歴史的分野が多くなり地図に接することが少ないためと思う。社会科の学習では、地図を大いに取り入れ具体性のある考える学習を進める必要があるものと考えらる。